「会員短信 15」

「私の俳句歴」　横山喜三郎

私は、定年退職後、信州児童文学会で童話創作をしたり、木曾南部の民話を題材にした物語を執筆し、二十回にわたって新聞に連載していただいたりもした。当時、妻や周りの人達から何度も俳句に誘われたが、同じ文系ながらいくら勧められても全然関心が無かった。

ところが、平成十四年一月、ＮＨＫ全国俳句大会で、妻の俳句「流氷にどかんと月の上りけり」が川崎展宏特選になり、ＮＨＫホールで表彰されたのに、びっくり仰天。大いに刺激されて、七十歳の時、自己流で俳句の勉学を始めた。妻の助言には頼らず、できた順に地元の新聞二紙に投稿した。投句を始めて丁度二ヶ月後、「八ヶ岳七変化して冬日落つ」が信濃毎日新聞の俳壇欄に三席で入選。何とか「コツ」を掴むことができた。

しかし、七十歳から始めた俳句が大成するはずもなく、それならと、短歌、川柳の世界へも手を伸ばした。それから、一年以上たったある日、偶然、俳句雑誌『俳壇』の「微苦笑俳壇」欄を目にした。「これぞ私の求めていた俳句だ」と、早速、『俳壇』の定期購読者となり微苦笑俳句にのめり込むこととなった。最初に秀逸句となったのは、平成十五年九月号の「蝸牛と思ふなこれはエスカルゴ」で、フランス旅行の時の句であった。現在、八十七歳。体力の衰えとともに、すっかり脳も老化しているが、何とかもうひと頑張りしたい。

なめくじり程に残せず吾が歩み

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。